

しずれきガイドツアー 新コース始動！

2025年4月から
新コースを
新設します！

「府中宿の心臓 伝馬町をめぐる」

江戸時代、徳川家康により整備された東海道の19番目の宿場である府中宿（駿府）。このコースでは、宿場町の中心機能を担った伝馬町エリアを散策し、宿場の主要施設や街道沿いの名刹などを絵図とともに紹介します。

静岡市歴史博物館では、毎週土・日曜、祝休日に、博物館を出発してガイドと一緒に歴史スポットを歩いて巡るミニツアー「しずれきガイドツアー」を実施しています。（要事前申込）

午前の部 10:00～11:30
午後の部 13:30～15:00

要事前申込 ※空きがあれば当日参加可能

お申し込み
ください！

開館日カレンダー

4月							5月							6月						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5					1	2	3	1	2	3	4	5	6	7
6	7	8	9	10	11	12	4	5	6	7	8	9	10	8	9	10	11	12	13	14
13	14	15	16	17	18	19	11	12	13	14	15	16	17	15	16	17	18	19	20	21
20	21	22	23	24	25	26	18	19	20	21	22	23	24	22	23	24	25	26	27	28
27	28	29	30				25	26	27	28	29	30	31	29	30					

● 休館日 □ 19:00まで開館

開館時間 9:00～18:00（※展示室への入場は閉館30分前まで）

休館日 月曜日（国民の祝日、休日にあたるときは開館、翌平日休館）、
年末年始（12/29～1/3）※臨時開館・臨時休館あり

基本展示観覧料
一般 600円（480円）
高校生・大学生・静岡市内居住70歳以上 420円（330円）
小中学生 150円（120円）
静岡市内居住・通学の小中学生、未就学児は無料
※（ ）内は団体20人以上の料金。 ※企画展示は別途料金設定有。
※「一般」以外の方は身分証明書等をご提示ください。
※障害者手帳をお持ちの方とその付添者1人は無料。

交通アクセス
【JRをご利用の場合】
「静岡駅」下車、北口から
●徒歩15分、タクシーで約10分
●駿府浪漫バス（10番乗り場）で「東御門」下車すぐ
●しずてつジャストラインバス
「県庁・静岡市役所葵区役所前」下車 徒歩6分

【静岡鉄道をご利用の場合】

●「新静岡駅」下車 徒歩8分

【富士山静岡空港をご利用の場合】

●空港からしずてつジャストラインバス
富士山静岡空港静岡線「新静岡」下車 徒歩8分

【お車でお越しの場合】

●東名静岡ICより約20分
※隣接及び近隣の有料駐車場をご利用ください。



静岡市歴史博物館
Shizuoka City Museum of History

静岡市葵区追手町4番16号 TEL:054-204-1005
ホームページ: <https://scmh.jp> FAX:054-204-7373
指定管理者 公益財団法人静岡市文化振興財団



発行：令和7年3月

静岡の過去を学び、今を知る。そして、未来を考える。

彰往考来

しょうおうこうらい

Shizuoka
City
Museum of
History
静岡市歴史博物館

静岡市歴史博物館
季刊誌
第10号

巻頭 訪ねてみよう 歴史スポット

山城のような雰囲気を楽しむ

おしまじんやあと

小島陣屋跡



関連記事 3ページ

企画展

「明治維新と静岡

よしのぶ いえさと

徳川慶喜、家達と旧幕臣たち」

4月26日（土）～6月8日（日）



徳川家達書「恭儉」（当館所蔵）

彰往考来とは… 「過去の歴史を探究して、よりよい未来をつくるヒントを得る」という意味が込められ、博物館のシンボルとして徳川家達の書が展示室に掲げられています。



訪ねてみよう！歴史スポット

山城のような雰囲気を楽しむ

おしまじんやあと

小島陣屋跡



枡形表門

史跡 小島陣屋跡

- 場所** 静岡県静岡市清水区小島本町・小島町地内
- 行き方** JR興津駅からバス「小島南」下車徒歩10分
- 関連**
 - 小島陣屋御殿 書院(静岡市指定文化財)(復原)
内部を一般公開しています(公開日については静岡市HPでご確認ください)
 - 静岡市埋蔵文化財センター(静岡市清水区横砂東町33-2)
出土遺物の一部を公開しています(開館時間9:00~16:30)
休館日:土・日曜、祝日(ただし、第1・第3日曜日は開館)



JR興津駅から、興津川に沿って5キロほど北へ向かうと、かつて一万石の大名滝脇松平氏が庵原郡小島村(現清水区小島)に築いた小島陣屋跡があります。城郭を思わせる石垣が残るなど江戸時代中期における大名陣屋の在り方と構造を知る上で貴重であると評価され、平成18(2006)年に国指定史跡となりました。

三代將軍徳川家光によって、「1万石以上の領地を持つ藩主」が大名と定められました。なかでも、城を持てる国主大名・準国主大名・城主大名と、城を持ってない城主格大名・無城主大名というように、その領地(石高)で、大名の格が決まっていました。小島藩主であった滝脇松平氏のような城を持てなかった無城主大名の居所・藩政の本拠地は「陣屋」と呼ばれていました。

江戸時代中期、宝永元(1704)年に、戦国時代まで滝脇(愛知県豊田市)の領主であった松平家の松平安房守信治が小島に陣屋を構え、それから明治元(1868)年まで、この場所は小島藩の本拠地として藩政が行われていました。静岡藩が成立してからは藩役所として、廃藩置県のは、明治7(1874)年に、敷地に小島小学校ができ、藩主が暮らした建物(御殿)を校舎の一部として活用していました。

昭和3(1928)年の小学校移転に伴い、書院だけは国道沿いに移築され、公会堂として使われていました。書院以外の建物は取り壊され、陣屋跡は、しばらく畑として利用されることになります。国指定史跡となったことで、現在は少しずつ整備が進められています。令和4年~令和6年にかけて、書院を小島陣屋の当時の位置に移築して、江戸時代の姿に復原する工事がおこなわれました。江戸時代の部材を可能な限り活用し、当時の雰囲気を感ずる事ができます。特に、江戸時代から使われていたとされる屋根瓦には、松平家の紋である「丸に桔梗」を見ることができます。

御殿書院の建つ主郭の西から南面に向かっては、平坦地が段状に築かれ、三段の曲輪を築いています。また、周りを取り囲む沢は、自然を活用した堀とも見えます。そのほか井戸の跡やかつて稲荷社があったと伝えられる棚田のような段々の平坦地が遺されています。

『小島村誌』(大正2(1913)年)に、旧藩士が描いたとされる小島陣屋図が掲載されています。現在、別当沢から陣屋跡へ向かうと、玄関へと続く大手道沿いに高い石垣が残っています。お城に見られるような急勾配の高い石垣の先には、枡形の構造も見ることができ、まるで山城のような雰囲気です。特に残されたそれぞれの石垣は、場所によって加工や積み方が異なっていて、江戸時代から明治時代にかけて、小島陣屋が長きに渡って人々の手で引き継がれてきた様子を今に伝えています。



別当沢



高石垣



井戸跡



大手付近石垣



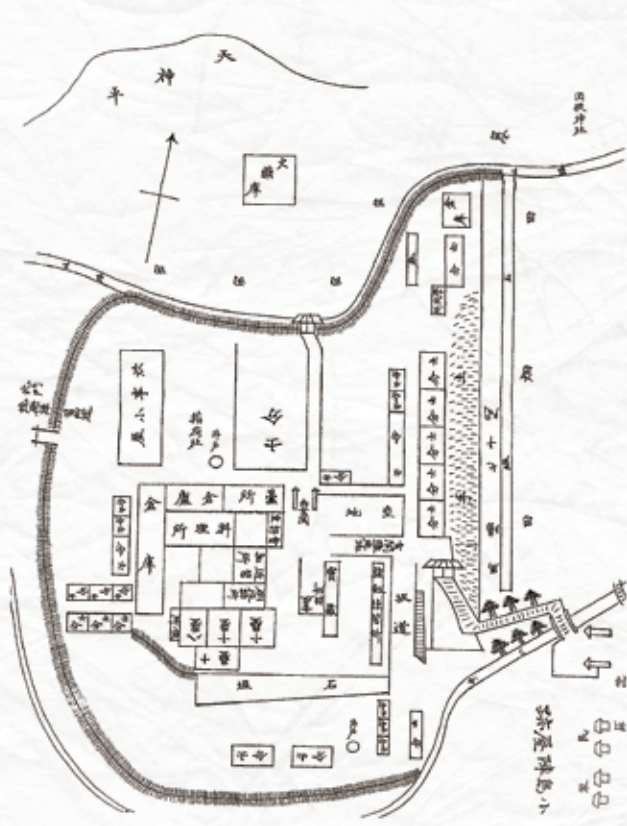
稲荷社跡付近石垣



主郭下石垣



稲荷社跡とされる付近の棚田のような段々の平坦地



旧藩士が描いた「小島陣屋図」(『小島村誌』(大正2年)より引用)

静岡へ移住した旧幕臣の経歴

市川家由緒書 慶応元(1865)年 当館所蔵



この資料は、江戸幕府の家臣であった市川家に伝えられた、「由緒書」(自らの家の歴史を記したもの)です。江戸時代には武士に限らず、百姓・町人にいたるまで、こうした形で自身の家の歴史を現在に示し、後世に伝えようとする動きがありました。

市川家の初代は三河国(愛知県)の生まれで、「神祖」つまり徳川家康の側近くに仕えて、武田信玄との有名な三方ヶ原の戦い(元亀3(1572)年)で討ち死にしたとあります。2代目も家康に従って江戸へ移り、武蔵国(埼玉県)で150石を得ました。その後の子孫はどちらかという「日陰」の暮らしを送っていたようですが、この資料を記した10代・孫之助は、幕末になってようやく將軍に拝謁する機会があり、衣服をもらっています。

10代・孫之助は江戸幕府の「作事方」という建築関係の役職につき、嘉永5(1852)年には三河国の「御霊屋」(家康を祀る建物)の造営に従事しました。また、この資料が記された慶応元(1865)年は家康の250年忌にあたります。孫之助は、日光で家康の法会に関する仕事に従事したことを記念してこの「由緒書」を記したと考えられるのです。この資料からは、三河以来、徳川家に仕え続け、特に三方ヶ原の戦いで討ち死にした先祖を持つ旧幕臣の誇りと、それを後世に伝えようとする強い思いが感じられます。

現在当館に収蔵されている市川家資料には、この孫之助が三河国や日光東照宮で仕事をした際の記録が含まれています。市川家は明治維新により徳川家に従って静岡へ移住してきた旧幕臣の家のひとつです。孫之助の次の代にあたると思われる市川孫十郎は、静岡藩の「水利路程掛」という土木関係の役職につき、その後静岡県に出仕しています。その子孫も、静岡師範学校の書記をしたり、教師になったりと、教育関係で活躍したことがわかっています。市川家資料からは、幕末から明治にかけての旧幕臣の経歴や活動を知ることができます。

市川家は、三河以来の歴史をもつ旧幕臣です。こうした旧幕臣たちが静岡で活躍の場を得て、現在の静岡の基礎を築きました。明治維新というと、徳川慶喜や勝海舟、山岡鉄舟といった有名な人物に注目しがちですが、その背景には今回取り上げた市川家のような多くの「名もなき」旧幕臣たちがいたのです。市川家資料のような、静岡に移住してきた旧幕臣の資料がまとまった形で発見され、当館に収蔵されることは大変貴重なことです。今回の企画展では、こうした知られざる旧幕臣たちの生き様にもスポットをあてたいと思います。

(学芸課 青木祐一)

企画展「明治維新と静岡 徳川慶喜、家達と旧幕臣たち」

江戸幕府が倒れ、明治維新が起こりました。徳川慶喜は謹慎し、家達が徳川家を継いで駿河府中(駿府、のちの静岡)へ移されます。それに伴って、多くの幕臣が徳川家に従って静岡へ移住してきました。静岡藩の成立、徳川慶喜や家達の動向なども含めて、静岡における徳川家と旧幕臣たちにとっての明治維新をひもときます。

会期	2025年4月26日(土)～6月8日(日)
開館時間	9:00～18:00(展示室入場は閉館30分前まで)
会場	3階企画展示室
企画展観覧料	一般1,000円／高校生・大学生・静岡市内70歳以上700円／小中学生250円、静岡市内居住・通学の小中学生、未就学児 無料(基本展示も合わせてご覧いただけます)

とっておきストーリー

お愛の方(西郷局)と徳川將軍家ゆかりの寺・宝台院

静岡市葵区常磐町の宝台院は、永正4(1507)年に鎌倉光明寺九世の観誓祐崇が柚木(静岡市葵区)に開創した龍泉寺を、江戸幕府の二代將軍・徳川秀忠が生母のお愛の方(西郷局)を弔うために現在の場所に移し、駿府における徳川將軍家の菩提寺として建て直した寺です。

お愛の方は戸塚忠春の娘とされ、母の実家である東三河の国衆・西郷氏に嫁ぎましたが、夫の死後に徳川家康の側室となり、天正7(1579)年に三男の秀忠を、翌年に四男の忠吉を浜松(浜松市中央区)で生みました。天正14(1586)年9月に家康と共に駿府(静岡市葵区)へ移り住みましたが、天正17年(1589)5月19日に駿府で亡くなりました。家康の一族だった松平家忠の日記『家忠日記』には、「若君様(秀忠)の」「御袋(生母)」である「西郷殿」が「御死去」し、5月24日に駿府の龍泉寺で葬儀が行われたことが記されています。お愛の方が家康の跡継ぎとなった秀忠の生母として、徳川家の中でも重要な地位にあったため、このような書き方がされたと考えられます。また『家忠日記』の記事から、お愛の方が駿府城の女性たちを取り仕切る家康の「妻」であったとする見解もあります。



西郷局(お愛の方)の墓(宝台院)

さらに後世の伝承によれば、お愛の方は美しく温厚で人望があり、自身の目が悪かったために盲目の女性を保護し、常に衣服飲食を施していたとされ、お愛の方の死を聞いた大勢の盲目の女性たちが連日、龍泉寺の門前で彼女のために冥福を祈ったといわれています。

お愛の方の死を悲しんだ家康は、江戸幕府を開いた翌年の慶長9(1604)年に龍泉寺で17回忌を営み、自画像や家康の父の広忠から譲られた太刀などを寄進し、家康が身の守りとして信仰していた木造阿弥陀如来立像(白本尊)を龍泉寺の本尊としました。この木造阿弥陀如来立像の複製は当館で展示されています。

また、秀忠の娘和子(東福門院)が後水尾天皇の中宮(皇后)となり、その娘(興子内親王)が明正天皇として即位したことにより、曾祖母にあたるお愛の方にも寛永5(1628)年5月に従一位が追贈され、諱を「源昌子」、法名を「宝台院殿一品大夫人松譽定樹大禪定尼」とされました。この時、龍泉寺から名を改められた宝台院は、寺領として300石を与えられ、住職は江戸城入りの時に10万石の格式とされ、さらに後水尾天皇の勅許により紫衣を許されました。

それから240年後の慶応4(1868)年7月、明治新政府に江戸城を明け渡した十五代將軍の徳川慶喜が駿府の宝台院で謹慎したのも、徳川將軍家との深い関係があったためと考えられます。旧国宝だった本堂は昭和15(1940)年の静岡大火で焼失し、徳川將軍家の威容を誇った往時の姿は失われましたが、境内にはお愛の方(西郷局)の墓が残されています。

(学芸課 鈴木将典)

当館では令和6年10月5日(土)～12月15日(日)にかけて、東京両国にある江戸東京博物館の収蔵品を展示する企画展「QuizKnockと巡る江戸東京博物館展」を開催しました。江戸東京博物館は江戸・東京の歴史文化を、貴重な実物・複製資料だけでなく体験模型等も交えて紹介しています。本展でも、一軒一軒の店内まで描かれた資料や、江戸時代の寿司屋やそば屋、当時の料理を再現した模型、肥桶などの体験模型等の展示、また東大発の知識集団QuizKnockの解説が加わり、来館者にはよりリアルに江戸の人びとの衣・食・住を感じてもらうことができたと感じています。

今回企画展を当館で開催した一番の目的は、江戸東京博物館のこれまでの研究から明らかになってきた江戸の歴史・文化、人びとの暮らしが同時代の駿府の人びとのそれに直接通じるからです。本稿では、それを受けて改めて江戸時代の資料から駿府城下町内の人びとの営みの一端を見つめ直してみたいと思います。

◆『東街便覧図略』に描かれた駿府城下町

『東街便覧図略』は天明6(1786)年に高力種信が熱田(現愛知県名古屋市)から品川(現東京都品川区)までの東海道沿いを紹介した本です。「平和」が到来した江戸時代、次第に街道沿いには物見遊山を楽しむ庶民も増え、各地の名所・旧跡を巡り、土地の名物を楽しみにしていました。『東街便覧図略』にもそうした各地の名所・名物が描き込まれ、東海道が通る駿府城下町内についても取り上げられています。駿府とその近郊で数か所が紹介されていますが、今回は紙幅の都合上、一か所を細かく見ていきたいと思います。



府中宿『東街便覧図畧』(名古屋大学附属図書館 岡谷文庫)

ば、慶安年中(地誌『駿河志料』では慶長年中)弥勒町の町名の由来ともなった山伏の弥勒院が師匠の勘当を受けて還俗し、ここで餅を売りはじめたのがはじまりと伝わります。

さて『東街便覧図略』では二ページにわたって弥勒町の安倍川餅屋(当時の通称「安倍川 五文取」)が取り上げられます。紹介される店は当時の安倍川餅の有名店「亀屋」。軒先には店名にあわせ亀の暖簾が掛けられます。店内に目をむけると、座敷に上がって休むことができたのでしょうか、畳敷きの空間が広がります。部屋の中には鶴や竹などめでたい図柄が描かれた襖や屏風が置かれ、贅沢さも感じられます。

画面に目をむけると、まず左側には店の人びとが描かれます。湯飲み、釜などが置かれ、茶や餅をここで用意するのでしょうか。年配の女性が湯を沸かしています。右の女性は出来上がった安倍川餅を運んでいるようです。右側の画面には客たちが描かれます。腰に刀を下げた中間(下級武士)風の装束の二人が店先で茶を飲ん

静岡市歴史博物館
学芸員
増田 亜矢乃



駿府城下町図(当館所蔵)

◆安倍川餅 亀屋の店先

現在でも静岡の名物として名高い安倍川餅。江戸時代には安倍川兩岸で販売されていたといいますが、そのはじまりは駿府城下町の西の玄関口でもある弥勒町(現静岡市葵区)と伝えられます。弥勒町は城下町の西端の見付(城下町内の出入りを見張る施設)よりさらに西側にあり、橋が架からない安倍川の川越しの管理をする川会所が置かれた駿府周辺の交通を支える重要な拠点でもありました。江戸時代の地誌『駿河記』によれ

で休憩し、横では彼らをを運んできた駕籠かきでしょうか、一人は腰を落として休息しており、旅人が一休みする店先、店内の様子がうかがえます。

◆海道随一の甘味物

『東街便覧図略』に紹介されるところによれば、当時の安倍川餅は黄粉をまぶした非常に小さな餅で、竹細工の椀(菓子のをせる皿)に10個ずつ盛って出していたといいます。この一皿で5文、当時のそれぞれの収入にもよりますが、1文20円で換算すれば100円と非常に手頃な値段に感じられます。

安倍川餅のおいしさ故でしょうか、口当たりがよいのではじめて食べる人はつつい食べ過ぎて大金が出ていってしまうとか、またとある女性が130文分(5文10個とすると260個、代金2,600円)の餅を食べてしまい、恥ずかしさのあまり落命してしまったなど、事実は定かではありませんが、里ではそのような話も聞かれたと言います。

作者の種信によれば、そのおいしさは「海道におひて第一の甘味物(うまいもの)」とも評しており、旅人たちの楽しみとなっていたことでしょう。また同時に「高直(値)物の最上」であるとも書かれており、財布の紐の緩んだ旅人たちにとっては予想だにしない出費になっていたのかもしれない。

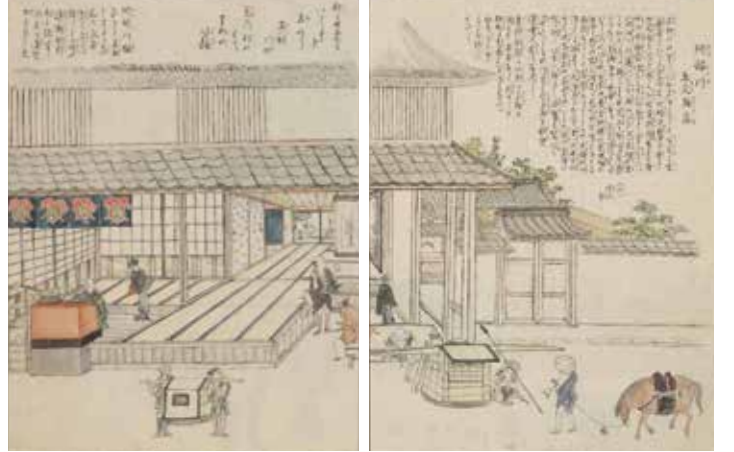
◆食べるだけじゃない「亀屋」

亀屋の紹介にはもう一ページが割かれています。二ページ目は「亀屋庭前櫻竹林之図」とあり、先ほどの画面の右手、店内右側に入り込んだ空間が描かれます。櫻竹(棕櫚竹)は江戸時代に中国から伝わった観賞用の木です。通常3mにもなるとされるこの竹が、亀屋は高さ3間(約5m)、広さも6間(約11m)もあり、種信も「海道の珍物 旅中の一奇観たり」と一見の価値ありと評しています。店内の客に目をやると、やはり誰もがその大きさ、迫力に驚いているようです。旅人たちの中にはこの巨大な竹を一目見ようと亀屋を訪れた人もいたのかもしれない。

もちろんこの店で名物安倍川餅は欠かせません。座っている客の右隣には器(竹細工でしょうか)にのった黄色い安倍川餅が置かれています。その左の旅人は箸をもっていますから箸でつまんで食べていたのでしょうか。彼らは装束から見ても町人などの身分でしょうか。店内をのぞくとさまざまな身分の人たち、そしてさまざまな地域の人びとが立ち寄っていたことがうかがえます。

◆一点の資料から読み解く

今回紹介した絵画資料だけでなく、古文書、刀など、歴史文化を伝えるさまざまな資料が見方によって私たちにたくさんの情報を伝えてくれます。静岡では昭和15(1940)年の静岡大火や同20年の静岡空襲によって多くの資料が失われましたが、今回の展示を通して、残された資料からまだまだたくさんの情報を読み取ることができると実感しています。今後も調査研究を蓄積し、駿府・静岡の人びとの営みを紹介していきたいと思います。



阿部川五文取店『東街便覧図畧』(名古屋大学附属図書館 岡谷文庫)



亀屋庭前櫻竹林之図『東街便覧図畧』(名古屋大学附属図書館 岡谷文庫)